

身体図式から見た認知の能動性

Active Nature of Cognition: From the Perspective of Body Schema

田中 彰吾
Shogo Tanaka

東海大学／理化学研究所
Tokai University / RIKEN
shogot@tokai-u.jp

概要

ひとは自らの身体を通じて環境を知覚し、また自らの身体とともに環境に働きかける。ひとの生は、身体と環境との間で繰り返される無限の知覚-行為循環である。本発表では、この「知覚-行為循環」について、哲学者メルロ＝ポンティの「身体図式」の理論に基づいて考察し、認知の能動性について言及する。

キーワード：身体図式、知覚-行為循環、生きられた身体、現象学、メルロ＝ポンティ

1. 知覚と行為の起点としての身体

ひとは世界を知覚し、世界の中で行為することで生きている。知覚にとっても行為にとっても、その起点となるのは身体である、ひとは自らの身体を通じて環境や対象を知覚し、また自らの身体とともに環境に働きかける。ひとの生は、身体と環境との間で繰り返される無限の知覚-行為循環であると言える。本発表では、この「知覚-行為循環」について、哲学者メルロ＝ポンティの「身体図式」(ボディスキーマ)の理論に基づいて考察し、認知の能動性について言及する。[1]

2. 「生きられた身体」に備わる図式

メルロ＝ポンティを含め、現象学的哲学が前提とする身体の見方は「生きられた身体 (lived body, Leib)」という概念に集約される。生きられた身体は物理的身体 (physical body, Körper) に対置される概念で、三人称の観点から物体として理解できる身体ではなく、一人称の個別主体によって生きられている「私の身体」である。

生きられた身体にはきわめて興味深い性質がある。それは、知覚と行為の主体でありながら、ひとが何らかの対象を知覚したり、対象に向かって働きかける行為を遂行している最中、生きられた身体が経験の背景に退いてしまうという性質である。例えば、文字を書いているときは「書く」という行為の対象であるペンや紙が、絵画を鑑賞しているときには知覚の対象であ

る絵画そのものが注意の対象として現れており、行為と知覚を遂行している身体それ自体は注意の対象にならない。生きられた身体は、知覚と行為において背景化することで、対象や環境の側を注意の焦点として前景化させるという性質を持っているのである。

メルロ＝ポンティによると、このように背景化する生きられた身体を支える中核的機能が身体図式である。神経科学の分野では、身体図式は基本的に脳内の身体表象という意味で理解されており、身体イメージという概念と混同して用いられることも多いが、メルロ＝ポンティはこのような発想を取らない(それゆえ身体イメージという概念も用いない)。脳内の身体表象ではなく、環境と相互作用を行ううえで必要な行為を身体側で組織化する図式的な機能という発想で身体図式を捉えている。

3. 身体図式の3つの機能

拙著で論じた通り、メルロ＝ポンティの身体図式は、次の3つの機能を持つものとして理解できる。[2]

(a)統合機能：身体図式は、神経科学で理解されているように、単に身体部位の位置関係や姿勢についての認知を司るだけでなく、各身体部位の運動を取りまとめつつ環境に向かう行為を組織化する。対象や環境へと効果的に働きかける行為を組織化するには、下肢・体幹・上肢・頭部など全身各部位の運動を協調させ、ひとつの行為に統合することが必要である。全身が滑らかに連動してぎこちなさが消えるからこそ、身体は経験の焦点にならず、背景として消え去ることができるのである。

(b)堆積機能：身体図式は、環境と関わるうえで習慣化された行為を堆積する機能を持つ。生きられた身体が日常生活において遂行する行為の多くは、比較的安定した環境で必要とされるパターン化された行為である(歩く・走る・つかむ・投げる・泳ぐ等)。こうした基本的な行為が習慣として身体に堆積することで、安定した仕方で環境に関わり、環境に適応することがで

きる。ひとたび習慣化した行為は暗黙に遂行できるようになり、行為遂行中に身体が背景化することを可能にする。

(c)知覚更新機能：身体図式は、学習された運動行為を習慣として堆積するとともに、習慣に連動する行為可能性を環境内に知覚できるようにする。知覚はそもそも受動的な刺激の受容ではなく、身体にとって意味のある情報を能動的に選択して受容する過程である。生きられた身体に一定の行為を誘発する可能性のある情報は知覚されやすく、行為に関連しない情報は無視される。新たな行為を学習するたびに、身体図式は、行為可能性に関連する情報を環境からより豊かに受容することを可能にする。

4. 「われできる」の意識

以上のように、生きられた身体はその中核的機能として身体図式を備えている。これにより、ひとは暗黙に行為を遂行することができ、身体そのものに注意を向けることなく対象を知覚することができる。「認知の能動性」という観点から身体図式論を改めて整理すると、次のように要約できるだろう。

知覚が単なる受動的な刺激の受容と異なるのは、身体図式に裏打ちされた種々の行為可能性が生きられた身体に備わっているからである。身体図式は、与えられた環境に向かって行為可能性を投射し、その可能性に見合った情報を選択的に受容する。

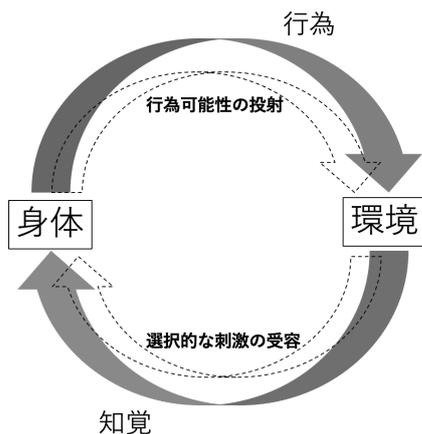


図1：身体図式と知覚-行為循環

例えば、泳ぎのスキルを身につけている人とそうでない人とでは、同じプールの前に立った時にもその見え方は大きく異なる。前者にとっては「泳げそう」「飛び込めそう」「体を水に浮かべられそう」な場所に見え

る一方、後者にとっては「体が沈みそう」「息ができなさそう」「水を飲んでしまいそう」な場所に見える。

哲学者のデカルトはかつて「われ思う」という表現で反省的な自己意識のあり方を表現したが、メルロ＝ポンティはこれに対して「われできる (je peux, I can)」という表現で反省に先立つ原初的な意識のあり方を表現している。ひとが世界を認知する最初の場面で起きているのは、身体図式の行為可能性に裏付けられた「われできる」という前反省的な意識であり、与えられた環境の中で実現できそうな行為に関連する知覚なのである。

文献

- [1] Merleau-Ponty, M., (1945) “Phénoménologie de la perception”, Paris: Gallimard.
- [2] 田中彰吾, (2022) “自己と他者：身体性のパースペクティブから”, 東京大学出版会